

歴史人口学からみた生と死 五

鬼頭 宏

五、出産と子の育成

(一)

毎年五月五日が近づく、新聞に子どもの人口が発表される。過去三十年間、総人口に占める年少人口（一五歳未満）の割合は減少しつづけているが、今年はどうなるだろうか。

昨年は人口動態統計の上で特筆すべき年だった。人口千人に対

する出生数が一三・七（推定）と、四十一年の水準にならぶ低出生率を記録したのである。四十一年は丙午（ひのえうま）歳にあたり、女兒の出生日を偽って登録することもあったと考えられるので、昨年は、明治三十三年に人口動態統計が始まって以来の最低記録になったと言える。最近の出生率低下傾向の原因として、終戦直後のベビー・ブーム期に生まれた女性が出産適齢期を過ぎつつあり、適齢層の女子人口が減少していることもあるが、子どもを産みながらない夫婦が増加していることが重要である。女性の社会的進出や子ども中心から夫婦中心の生活を望むという価値観の変化、

表1 出生児数別にみた夫婦組数の分布(信濃・湯舟沢村)

分 類	出 生 児 数 (人)										平均 出生数
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
完結家族	1	3	7	6	13	19	11	7	2	2	4.66
非完結家族	24	25	12	11	8	7	2	1	0	0	1.87
合 計	25	28	19	17	21	26	13	8	2	2	3.10

大都市でとくに著しい住宅事情の悪化、高学歴化に伴なう教育費の増大などが出生児数を少なくしているのである。

五十二年に実施された第七次出生力調査(厚生省)によると、新婚も含めた全夫婦の平均出生児数は一・八九人、結婚二〇年以上の夫婦については二・三九人だった。将来の完結出生数は二・二人程度と推定されている。

このように現在では二人程度の出生がふつうになっているのだが、江戸時代の夫婦は何人くらい産み、どのように育てていたのだろうか。今回は信濃国湯舟沢村(現・岐阜県中津川市)の例を中心に、家族復元法を利用して宗門改

帳に登場する夫婦の追跡調査を行なった結果を紹介することしよう(鬼頭・一九七四)(鬼頭・一九八二)。

(二)

表1は湯舟沢村における一夫婦あたり出生数の分布である。観察対象になったのは一七三一―一六五年に結婚した夫婦のうち、妻が三〇歳までに結婚したケースである。これを妻が四五歳まで婚姻が持続した完結家族と、四五歳以前に婚姻が解消した非完結家族とに分けて示した。

全体の平均出生数三・一人は、意外に少ないという印象を与える。表からわかるように再生産年齢の上限に達しない非完結家族が多いこと(五六%)が第一の原因である。

江戸時代の婚姻が短命だったことはすでに見たとおりだが、このことはある家にとって子どもが少なかったことを必ずしも意味しない。若い年齢では再婚する男女の比率も高かったからである。完結家族についてみると平均出生数四・七人、ピークは五人にあった。

しかしこの数のほかに隠れた出産があって、実際の出生回数ももっと多かったと考えられる。というのは宗門改帳の資料的制約から、乳児死亡の大部分が把握されていないからである。したが

表2 有配偶年数(妻16~50歳)および妻の結婚年齢と出生数の関係

(信濃・湯沢村)

(1) 有配偶年数

(2) 結婚年齢

有配偶年数	夫婦	出生数	平均出生数	結婚年齢	夫婦	出生数	平均出生数
0~5	36	13	0.36	11~15	14	30	2.14
5~10	23	43	1.87	16~20	74	260	3.51
10~15	11	35	3.18	21~25	49	163	3.33
15~20	16	61	3.81	26~30	24	46	1.92
20~25	18	60	3.33	(3) 相関係数(N=161)			
25~30	23	104	4.52		単純相関		偏 相 関
30~35	34	183	5.38	有配偶年数	0.781		0.784
				結 婚 年 齢	-0.159		-0.184

つてここである「出生」数とは厳密には数え年二歳児の数であることに留意していただきたい。

さて表1をみると出生数の分布は相当幅広い(標準偏差二・三〇)のだが、何が生数を決めているのだろうか。結婚から出生にいたる過程を追って出生児数の決定要因について考えてみよう。

まず結婚年齢、とくに妻のそれと、次いで妻の再生産年齢(一般に一六・五〇歳)における有配偶期間が重要である。第三に夫婦の生殖にかかわる能力や性的交渉の頻度、第四に流産・死産の確率、第五に出生抑制(受胎調節・墮胎・嬰兒殺し)の強度、第六に授乳・離乳の習慣、そして最後に宗門改帳の場合には、出生児が史料に登録されるまでの期間に起きる乳児死亡も問題である。はじめに結婚年齢と有配偶期間との関係をとりあげ、第三点以下については直接知ることができないので、出生率と出生間隔の面から検討を加えることにしよう。

妻の結婚年齢が若く、有配偶年数が長ければ出生数が多くなることは容易に想像できる。表2がそれを物語っているだろう。

しかし出生数に及ぼす影響は二つの要因の間で差がある。再生産年齢(一六・五〇歳)における有配偶年数の方が出生数を決定するうえで大きい力を持っていることが、相関係数に現われている(有配偶年数の方が係数自体、大きいうえに高い有意水準にある

る)。

妻の結婚年齢の影響力が弱いのは、若年齢で結婚しても長続きするとは限らないからである。その証拠に、結婚年齢と有配偶年数の間には有意な相関関係は全く認められなかった(相関係数はマイナス0・0五七)。

それとともに、結婚が遅い場合には、おくれた年数をカバーするかのようになり、結婚初期の出産率(一年あたり出生数)が高まる傾向にあることも、結婚年齢と出生数の関連を弱めるもうひとつの理由である。

完結家族だけをみれば、当然、結婚年齢と出生数の関連は強くなるが、この場合、結婚が一年遅れると〇・二四人、したがって四年で一人ずつ出生数が減る関係が成立っている(出生数〓九・五四四一〇・二三五×結婚年齢)。

出生数と経済階層の間に負の相関関係があることを表わすことばとして、あまり響きはよくないが「貧乏人の子沢山」というのがある。いかにもありそうなことなのだが、実は、江戸時代にはその反対の現象が一般的だった。農村では、土地を多く保有する家族ほど、完結家族の出生数は多いという傾向が認められている。

例えば武蔵国甲山村(鬼頭一九七八)では保有石高五石を境にして、上層(地主・自作農)四・三人、下層(小作農)三・六人

だったし、濃尾地方農村(六ヶ村)(速水一九八〇)では、石高一〇石以上の五・九人に対して、一〇石未満層は三・八人と二人も差があった。

出生数における階層差を生んだ原因に、出稼経験率の違いなどによってもたらされる結婚年齢の早い遅い(上層では早く、下層では遅くなる傾向)があることは否定できない。しかし、もっと大きな働きをしているのは、婚内出産率の高低だった。婚内出産率は、有配偶期間中、妻が一年間に子を出産する確率で、上層農民の妻ほど出産力が大きかったのである。

(三)

年齢階級別出産率は、年齢階級ごとに、出生数をのべ年数(人数×有配偶年数)で除すことによって得られる。通常、二〇代前半に最も高い出産率が現われ、それ以後はなだらかに低下する形をとる。基本的には、出産率は女子の生物的妊娠能力を示す指標であるといえるが、それを基礎として、さきに指摘したさまざまな、生態学的、社会・経済的、文化的な要因からの影響をも反映し、非常に包括的な性格をもっている。

表3に、代表的な四地域の年齢階級別出産率を示している。このうち秩父大宮郷は江戸時代の中でも低い方の代表例であり、神

表 3 妻の年齢階級別出産率

地 域	妻 の 年 齢 階 級							期 待
	16～20	21～25	26～30	31～35	36～40	41～45	46～50	出生数
秩父・大宮郷 (1764～1848)	0.203	0.221	0.163	0.127	0.085	0.027	0.015	4.21
信濃・横内村 (1671～1871)	0.165	0.219	0.206	0.170	0.121	0.072	0.016	4.85
信濃・湯舟沢村 (1731～65)	0.194	0.233	0.240	0.211	0.162	0.093	0.022	5.78
尾張・神戸新田 (1776～1871)	0.386	0.379	0.270	0.227	0.188	0.099	0.009	7.79

(1)史料：(速水, 1967), (速水, 1973)および筆者の新たな調査による。

(2)期間：湯舟沢村は結婚年代、他は各期間中の出生について観察されている。

戸新田は高い方に属す(ただし神戸新田の一六・二五歳では過大評価されている可能性がある)。各年齢階級の出産率を合計し、それを五倍すると、一六歳から五〇歳まで結婚が持続した場合の期待出生数が得られる。これを比較すると、秩父大宮郷では四・二人であるのに対し、神戸新田では七・八人となり、大きな違いが生じることがわかるだろう。

出生数の階層間格差の原因となった出産率の違い、およびその地域差の背景は何だろうか。栄養摂取の水準や居住環境の違い、およびそれに由来する流・死産水準の違いなど、さまざまな要因が「自然」出産率を決定しているうえに、これに加えて意図的な出生抑制の果たした役割も大きかったと考えられる。

それぞれの要因がどの程度、決定的な影響を与えていたのかを知ることはできないけれど、いずれも、上層農民あるいは新田村で出産率が高く、下層農民あるいは都市で低いという事実と矛盾しないだろう。

(四)

最近の日本女性は第一子を二六・三歳、第二子を二八・六歳で産んでいる。結婚後の短かい期間に小数の子を産むのが平均的である。これに対し、現在よりもはるかに多くの子を長期間にわた

って産み続けるというのが、江戸時代の姿だった。

湯舟沢村の夫婦（完結家族）は、夫二八・四、妻二〇・八で結婚して、二年で産み始める場合がもっとも多い（平均三・一年）。最頻出生数の五人目の子を平均一八・〇年後、そして第七子を二二・四年後に産んで、大半（九四〇％）の夫婦は子を産み終えていた。最終児を産んだ時の妻の年齢は二五から四八歳まで広い分布を見せているが、四二歳にもっとも多くが集中し（一七％）、平均三九・三歳だった。

このように、結婚してから二〇年前後にわたって出産可能年齢のほとんどを出産に追われる江戸時代の女性にとって、その負担はたいへん大きかったことだろう。またそれだけではなく、きよだいの数の多さ、長子が成年に達する頃に末子が生まれるという年齢開差の大きいことなども、家族関係や子の人格形成の面において現代との違いをもたらしたところだろう。

子の産み方を出生間隔の面からみてみよう（表4）。出生数との関連で妻の出生開始年齢と最終出

表4 完結家族の出生数別・出生順位別出生間隔（信濃・湯舟沢村）

出生数(組)	出 生 順 位									出生年齢	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	第1子	最終子
1 (3)	9.0									32.7	32.7
2 (7)	3.1	6.7								27.6	34.3
3 (6)	3.0	4.3	5.2							26.8	36.3
4 (13)	3.8	4.2	4.9	5.6						23.2	38.1
5 (19)	2.8	4.6	3.7	4.8	5.2					22.2	40.5
6 (11)	1.9	3.2	3.0	3.3	4.4	3.7				23.1	40.9
7 (7)	2.1	3.1	4.0	2.7	2.3	3.9	4.0			22.4	43.0
8 (2)	2.5	3.5	3.5	2.0	6.5	2.5	3.5	4.0		21.5	47.0
9 (2)	3.0	2.5	3.0	2.0	2.0	2.5	4.5	1.5	7.0	19.0	44.0
全体(70)	3.1	3.8	4.0	4.2	4.6	3.5	4.0	2.8	7.0	23.8	39.3

生年齢をみると、出生数が多いほど産み始め年齢は若く、産み終える年齢は遅くなっている。

出生数別、出生順位別に出生間隔をみると、結婚から第一子出生までの期間は短かく（三・一年）、最終出生児の出生間隔はそれより二年も長い（五・一年）。しかしこのことから、出生順がおそくなるにしたがって出生間隔が開いていくというのは、妥当ではない。中間順位の出生間隔にはそのような関係を明瞭にみる事ができないからである。したがって年齢とともに出生率が低下していたのは、出産間隔が出生順位とともに拡がっていくからではなく、妻の年齢の高齢化とともに出産を切り上げる夫婦が多くなるからだろう。最終出生間隔が長いことは、個々の夫婦にとって望ましい出生数に達したときに、その段階で産み控えが行なわれたと考えられないだろうか。

結婚から第一子出生までの期間が短かいのは、相対的に妻の出生年齢が低く、したがって出生率が高いこと、子の出生を強く期待していたであろうことが考えられるが、宗門改帳の結婚記録が正確でなかったかも知れないということも見逃せない。

出生があつて初めて結婚が登録されることは、江戸時代の農民の婚姻慣行として考えられることである。例えば神戸新田では出生間隔が〇年、つまり結婚と同年に第一子の出生があつたケース

が四分の一を越えていて、平均出生間隔（結婚より第一子出生は一・三年しかない。結婚の登録が遅れがちだったことを強く推測させるものである。

表4からは、出生数が少ないほど出生間隔が長く、反対に多産な夫婦でそれは短かいという傾向も明らかになる。少産の妻の産力そのものが小さかったためか（栄養、体質、環境など）、産み控えあるいは出生抑制が意図的に行なわれていたのかいずれかだろう。

ところで第一子の誕生まで三年、それ以後の出生間隔が四年というのは、経験的にみて少し間があきすぎているような気がする。出産（生）間隔は、(一)出産後の無月経期間、(二)流産によって失なわれる期間、(三)妊娠から出産までの期間によって構成される。宗門改帳によってとらえられる出生間隔には、さらに(四)乳児死亡によって失なわれる期間も加えられなければならない。したがって実際の出産期間よりも、宗門改帳の出生間隔はかなり長くなっているはずである。

妊娠から出産までの期間（最終月経から四〇週）に大きなばらつきはないだろう。それにたいして出産後の不妊期間は、おもに授乳との関係が大きくかわる。授乳期間が長びけば妊娠する期間は遅く、離乳が早ければ次の子の妊娠も早まる。鈴木継美（一九

八〇）が紹介しているアフリカのルワンダの例では、授乳婦の半数が妊娠するのは出産から一八ヶ月以後であるが、非授乳婦では五ヶ月以内に半数が妊娠している。

アンリのジュネーブ（スイス）市民にかんする歴史人口学的研究（Henri, 1956）は、一七世紀前半に、妻の出産率が急激に高まり、平均出生間隔も短縮したことを明らかにしている。この現象を、この期間に乳母によって子どもを育てる習慣が一般化したことと関連させて説明している。

（二）、四にあげた流産、死産および乳児死亡がどれほど出生間隔を長びかせていたかを、宗門改帳からつかむことはできない。しかし辛いことに、特定地域で実施された妊産婦調査である懐妊書上帳が、それを教えてくれる。

懐妊書上帳を利用した筆者の調査（鬼頭・一九七六）から、一九世紀初頭における陸奥国白川郡（現・福島県）の一農村の例を紹介しよう。懐妊書上帳には妊娠した女子が登録されて、その後の経過（流産、死産、出生、乳児死亡）が書き込まれている。母親の名前を手掛りに家族を復元して出産間隔を計算すると二・四四年だった。

出産間隔は前順位の子の状況によって拡がったり縮小する。前の子が生存している場合には二・七〇年と長く、死産および乳児

死亡のあとでは一・七六年と短い。その差は約一年あり、授乳の有無が大きく影響していたのだろう。

これをもとに、乳児死亡や死産があっても記録されない場合の出生間隔は見かけ上、四・六六年（二・七〇＋一・七六）と計算できる。かりに乳児死亡が出生の二〇％あるとすると、全体の出生間隔は三・一年、それが三〇％なら三・三年となることが推定される。

この長さは湯舟沢村の例に近く、宗門改帳から得られた出産率や出生間隔が、乳児死亡率によって大きな影響を受けていることがわかるだろう。また江戸時代の夫婦が見かけ以上に多産であったことも理解できる。次回は、乳幼児死亡を中心に、生まれた子がどのように生残り、成育していったのかを見ることにしよう。

（上智大学）

〔参考文献〕

速水融 一九六七 「徳川後期尾張一農村の人口統計統篇——Family Reconstitution 法の適用——」『三田学会雑誌』六〇巻一〇号。

速水融 一九七三『近世農村の歴史人口学的研究』東洋経済新報社。

速水融 一九八〇 「近世濃尾地方農民の人口学的觀察——四六〇〇組の家族復元を通じて——」 徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十四年度。

Henri, Louis 1956 *Anciennes Familles genevoises*, I.N.E.D.

鬼頭宏 一九七四 「木曾湯舟沢村人口統計——一六七五—一七九六年——」 『三田学会雑誌』六七卷五号。

鬼頭宏 一九七六 「徳川時代農村の乳児死亡——懷妊書上帳の統計的研究——」 『三田学会雑誌』六九卷八号。

鬼頭宏 一九七八 「徳川時代農村の人口再生産構造——武蔵国甲山村、一七七七—一八七一——」 『三田学会雑誌』七一卷四号。

鬼頭宏 一九八一 「近世農村における家族形態の周期的変化」 『上智経済論集』二七卷二・三号。

鈴木継美 一九八〇 『人類生態学の方法』東京大学出版会。

